■論　文■

ケア・ミックスにおけるジェンダー関係

― 成人子によるケアに対する高齢者の選好の分析 ―

山　口　麻　衣*

抄　録

配偶者喪失期における高齢者自身の成人子によるケアに対する選好を子どものジェンダー構成の違いに焦点をあてて分析し，ケア・ミックスにおけるジェンダー関係を検討することを目的とした。A 県 B 市の有子高齢者（N ＝ 745，年齢 60 － 74）を対象に分析した。主な結果として，①身体ケアの場合，娘の割合が多いものの，息子の妻よりも息子の割合が多い点などから，選好レベルにおいてケアのジェンダー役割意識が揺らぎつつある可能性があること，②非手段的ケアにおいて，男性による息子への強いケア選好が示され，担い手としての子の性別だけでなく，高齢者自身の性別とも関連し，多様なIC担い手選好であること，③息子と娘の両方がいる者を対象とした多項ロジスティック回帰分析の結果，生活援助選好を除く３つの選好で，女性の方が男性よりも娘を選好する結果となったこと，④息子のみいる者を対象としたロジスティック回帰分析の結果，身体ケア選好と相談選好に対して，男性の方が女性よりも息子を選好する結果となったことがあげられる。一地方都市での調査結果であり一般化はできないが，娘のみいる者，息子のみいる者，息子と娘の両方いる者に区別してケアの担い手選好を分析したことにより，ケア・ミックスにおけるジェンダー関係の違いによる IC 担い手選好の多様性を確認できたといえる。

Key words： ケア・ミックス，ケア選好，インフォーマル・ケア，家族介護，ジェンダー

Ⅰ．研究背景と目的

１．高齢者自身は誰にケアしてほしいのか

配偶者を喪失するということは高齢期の多くの人がライフコースにおいて迎える避けることのできない出来事であり，配偶者喪失後の人生はさまざまな面で変化に対する適応や生活拠点や生活そのものへの選択を余儀なくされる。平均寿命の伸長と家族のあり様の変化により，配偶者がいない状況でケアが必要となった場合，子を中心としたインフォーマルなケアにどの程度期待するかということは，ケアのミックスの中での他の資源活用の可能性も含めて検討されることになる。すなわち，フォーマルなケアの利用に対する意向や利用可能性とも関連し，フォーマルとインフォーマル

＊ Yamaguchi, Mai
ルーテル学院大学専任講師（社会福祉学科）

なケアを組み合わせた多様なケア・ミックスの中でオプションのひとつとして子によるケアをとらえたうえで，高齢者自身が子によるケアを望むのかどうかを把握していくことが求められる。ここではケアに関する望みをケア選好（ｃａｒｅ preferences）としてとらえ，とくに高齢者自身の配偶者喪失期における子によるケアへの選好について，ジェンダー関係という観点からまとめる。

ケアの担い手の意向に関する実態調査の動向をみると，調査数は比較的多いが，質問方法によって結果はさまざまであることがわかる。虚弱になった場合の担い手に対する意向に関する国際比較調査（内閣府 2001）の日本人高齢者の回答結果から，①「配偶者」の回答が約半数弱（46.7%）を占めること，②「息子」(8.1%)，「娘」(9.8%)，「子の配偶者」(8.7%）の回答が8－10%の間で拮抗していること，③「ホームヘルパーなど介護を職業とする人」(10.4%）や「わからない」(11.2%）という回答がともに1割を超えていること，④その他の家族・親族や知人・友人などの比率が小さいことがわかる。また，男女で回答傾向が異なり，とくに配偶者への意向は男性が71%であるのに対し，女性は24.4%と格差が大きい。これはライフコース上，婚姻の年齢差や平均寿命の性差が影響し，確率として介護が必要な際に配偶者がいる可能性が高いことが影響していると考えられる。女性の場合，息子・娘・子の配偶者の比率（それぞれ11.9%，15.1%，13.3%)が男性よりも高い。ホームヘルパーについても女性が15.1%であるのに対し，男性が5.4%と差がある。女性の場合，子の配偶者や息子という回答は男女それぞれ，高年コーホートほど割合が高いことから，イエ規範や長男扶養規範が影響している可能性もある。

性別や年齢によるケアに関する意向の違いについては他の調査でも確認できる。たとえば「高齢者の健康に関する意識調査」(内閣府 2003a，65才以上対象）における在宅での介護の担い手（配偶者，子など14の選択肢から３つまでを選択）の回答結果をみると，男性は「配偶者」82.2%，「子供」40.1%，「子供の配偶者」15.8%であるのに比し，女性は「配偶者」27.2%，「子供」64.4%，「子供の配偶者」34.0%であった。前期高齢者と後期高齢者を比較すると，前期高齢者は「配偶者」66.2%，「子供」47.3%，「子供の配偶者」19.4%，「ホームヘルパー」20.7%であるのに比し，後期高齢者は「配偶者」36.8%，「子供」60.0%，「子供の配偶者」33.0%，「ホームヘルパー」17.1%であった。

「高齢者介護に関する世論調査」(内閣府 2003b，20 才以上対象）では，「家族の介護を中心とし，ホームヘルパーなど外部の者も利用したい」，「ホームヘルパーなど外部の者の介護を中心とし，あわせて家族による介護を受けたい」と答えた者のうち，家族の中で身の回りの世話を頼む相手（回答肢は配偶者，息子，娘，嫁など7つから１つ選択）についての回答をみると，男性の場合，60-69 才は，配偶者（84.4%)，娘（4.7%)，息子（3.6%)，嫁（2.0%）の順で多く，70 才以上は配偶者(75.3%)，娘(8.4%)，息子(7.3%)，嫁(3.9%)の順で多い。女性の場合は，60－69才は，配偶者(34.4%)，娘（32.6%)，嫁（11.8%)，息子（10.4%）の順で多く，70 才以上は娘（33.5%)，嫁（22.7%)，配偶者（17.3%)，息子（13.0%）の順で多い。

以上のような調査結果から，ケアに関する意向に男女差があり，女性の方が男性よりも，配偶者の回答が低く，子やその配偶者という回答や公的なサービスの担い手への回答が多いこと，親子のジェンダー構成が担い手への意向に関連することがわかる。

２．ケア・ミックスにおけるジェンダー関係と親子関係

ジェンダーの視点から家族内のケア役割をとらえることの重要性については多くの先行研究で論じられている（Ungerson 1987；Rossi 1993；笹谷 1999；大和 2004)。女性がケア役割を引き受ける要因に関する説としては，①主婦は時間という資源をもつという資源理論，②役割期待，役割同一化などの議論も含めた役割理論，③交換理論，④ジェンダー理論がある（袖井 1993：229)。ケアの受け手となる高齢者自身もケア役割を女性の役割

として受け止め，娘や息子の妻といった女性を担い手として選好することが考えられるが，ケアの担い手と受け手の性別の同一性に関連する議論を考慮する必要がある。山田（1999）は，介護などのケア労働が女性と結び付けられ，男性が介護者として避けられる二つの理由として，ケア労働が感情労働であること（女性はジェンダー化した成長過程で思いやりを持つ性格を有していること）とケアの身体性（身体接触を伴うケアにおいて，ケアを受ける側の意識において女性からケアを受けた方が恥ずかしさを感じにくいこと）をあげている。

以上のようなケアの担い手の議論は，子どもによる親へのケアの場合だけでなく，専門職としてのケアワーカーの役割とも関連するが，ここでは本稿のテーマである老親ケアに焦点をしぼると，母と息子，父と息子のケア受け手 ― 担い手関係で，意味合いが異なっている可能性があり，親子のダイアドなジェンダー関係に注目する必要性があるといえる。とくに高齢期だけの関係ではなく，生涯にわたる関係性の中での互恵的な親子サポート関係（Antonucci & Akiyama 1996）についても認識したうえで，ジェンダー化されたライフコースの視点（Moen 2001）から議論することが求められる。すなわち親と子の交錯するライフコース（藤崎 2000）を考慮し，人生における時間的な関係性の変容やケアをめぐるジェンダー関係も含めた議論が重要であろう。

老親ケアにおけるジェンダー差については，①利用可能時間仮説，②外部資源（教育や収入など）仮説，③社会化／イデオロギー仮説，④課題特化仮説がある（Finley 1989）。たとえば，親子の互酬性という観点から母と娘と義理の娘の関係を交換理論と互酬性概念から分析し，居住形態の変化，女性の社会的役割の変化，公的サービスの提供などの変化から従来の互酬的な交換関係に変化が生じることを論じた研究（Akiyama, Antonucci and Campbel l997）がある。これらの仮説や研究から，高齢者へのケアは複数の要因が関連しながらケア役割が遂行されることがうかがえる。介護保険制度と家族介護の関係や福祉制度と家族との関連については既に論じられている（藤崎 2002 & 2004）が，介護保険制度によるケアサービスが整備されてきたわが国において，伝統的な家族内のケア役割意識の変容とサービス提供との関連を実証的に分析することが求められる。

また，親子のジェンダー関係，ケアの内容，子どものジェンダー構成が関連することも論じられている（Montgomery 1992 など）。たとえば Campbell and Martin-Marthews（2003）は，娘だけではなく息子も親のケアに関与するが，性別の違いに伴うタブーも関連し，身体ケアは娘の方が多く，伝統的に男性の役割ととらえられている内容（財産管理，家屋管理など）は息子が多く，買物などジェンダーニュートラルな内容の場合は娘と息子関与差がない実証研究結果を示している。また，Matthews（1995）は，50組の姉妹・兄弟ダイアドの質的研究を行い，兄弟姉妹のジェンダー構成やサイズが親のジェンダーとともに重要な規定要因である点を論じている。日本の研究では，たとえば，全国家族調査データ（NFRJ98）のデータを分析し，子どもの親に対する介護経験において，手段的介護は女性が多いことを示した実証研究（安藤 2004）がある。

さらに，子による老親ケアに関する研究としては，扶養義務感に関連づけた議論（Blieszner & Hanmon 1992; Campbell and Martin-Marthews 2003），妻方か夫方かの影響（白波瀬 2000），子の距離や同居（安藤 2004），子供の就労（Doty, Jackson and Crown 1998）などの影響の議論もある。たとえば，Campbell and Martin-Marthews（2003）は，成人子の老親ケアに関する関与を義務づけ，動機づけ，制限する要因として，ケアへの関与を反映する扶養義務感，正当な言い訳の可能性，他の代替や選択のないケアの３点をあげる。白波瀬（2000）は，世代間支援のジェンダー差の量的実証研究を行い，ケアは妻方の親子間の結びつきが強いが，金銭は夫方父系的直系家族制が残る点や，親年齢，親の配偶者有無，同別居，親との距離，親の健康が親の世話に関連した点を示し

ている。安藤（2004）は，実の親である場合は同居と介護経験の関連が強いが，義理の親の場合は同居でないと介護の義務はそれほど生じていないことを示している。これらの先行研究は高齢者の意向に関する議論ではなく，子による老親ケアの実態や子の側のケア提供意向に関するものであるが，ケアをめぐるジェンダー関係を理解するのに役立つ知見といえる。

高齢者のケア選好全般やフォーマルとインフォーマルの組み合わせ選好に関する研究（Denton1997；Pinquart & Sorensen 2002;Wieliknk, Hujisman & McDonnell 1997 ）と比べて，高齢者の子によるケアに対する選好の研究はきわめて少ない。そのような中でケア選好の研究ではないが，兄弟姉妹構成，第一子（長男・長女），子への資産提供と関連付けて介護期待を論じた研究（小林 2004），子の距離や同居との関連から将来のケアの認知可能性を分析した研究（Koyano1996；Koyano, Hashimoto, Fukawa et.al, 1994）がある。小林（2004）は，親との距離，特に同居が強い影響をもち，長男（娘のみの場合の長女）であることもその子への期待を高めたこと，距離や長男か否か等の条件が同じ場合，娘夫婦への期待の方が息子夫婦への介護期待がより大きい傾向があったこと，不動産を譲渡した子により期待していたことを示した。この研究は，子どもを夫婦単位で分析し，娘，息子，息子の配偶者を区別していないが，出生順位や相続を分析に含めている点で参考となる。また，同居家族，とりわけ女性の同居家族に対して将来のケア認知が高いこと（Koyano 1996）や，別居子に対する将来ケアの認知可能性も高く，同居家族だけでなく別居子も重要であるとの指摘（Koyano, Hashimoto, Fukawa et.al, 1994）もあり，子との距離と子の性別がケア担い手選好と関連があることがうかがえる。

３．本研究の目的

以上のようなケアに関する意識調査や先行研究の動向から，配偶者喪失期のケア担い手選好は，成人子と老親という親子関係を軸に，ジェンダー化されたケア役割というジェンダー関係が交錯し，親子のジェンダー，距離，実子／義理関係などの要因が相互に関連することが理解できた。成人子の老親へのケア支援というテーマでの研究はかなりの蓄積があり，娘と息子の違いなどジェンダーの関連からも議論されているが，子によるケアとフォーマルなケアとの関係を同時に考慮した研究はきわめて少ない。また，ケアの担い手を検討する際，ジェンダー化されたライフコースの視点（Moen 2001）からとらえることが重要であり，親子のジェンダーやケア意識，子どものジェンダー構成や距離などの要因がケアの担い手への選好に関連することが予想されるものの，それらに関する十分な実証研究がなされていないことがわかる。そこで本分析では，配偶者喪失期における高齢者自身の成人子によるケアに対する選好を子どものジェンダー構成の違いに焦点をあてて分析し，ケア・ミックスにおけるジェンダー関係を検討することを目的とした。

主な作業仮説として，ケア内容により娘，息子，息子の妻への選好が異なり，手段的なほど娘への選好が高いが，その影響は子の数，距離，ジェンダー構成などのケアのネットワーク資源が関連し，娘が多く活用できるほど，娘への担い手選好が高いとらえた。また，家族介護不安の影響を統制後もケア規範がIC担い手選好に関連するととらえた。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象および時期

調査対象はＡ県Ｂ市の 60 － 74 歳の在宅高年者（1059 名）であり，有効回答者は 810 名（男性 396 名，女性414名，回収率は76.5%）であった。本稿での分析対象は有子者（N ＝ 745）とした[(1)]。調査は 2003 年 11 － 12 月に２段無作為抽出，訪問面接法（一部留置き）で行った。

２．調査項目

インフォーマルなケアの担い手選好（以下，IC担い手選好）は，フォーマルケアとインフォーマ

ルケアの組み合わせ選好（以下，FC／IC組み合わせ選好）の副問として測定した。すなわち，FC／IC組み合わせ選好（配偶者に先立たれた場合を想定）を身体ケア，生活援助，相談，声かけの場合の４項目として７件法でたずね，その回答において「すべてを公的なケアで」（以下，「すべてFCで」）と回答した人を除いてIC担い手選好を把握した。具体的には「家族・親戚・近所の人などに手助けを受ける場合，どなたに介護や手助けを受けることを望みますか」と質問し，「息子」，「娘」，「嫁」，「婿」，「その他の親族」，「近所の人」，「近所の人以外の友人・知人」，「その他」の８つの回答肢の中から一つ回答を得た。

関連要因として，ケアのネットワーク資源，ケア規範，家族介護不安を含めた。ケアのネットワーク資源としては，特に子どものジェンダー構成・規模・地理的距離を考慮して，近・同居の息子（有＝１とするダミー変数），近・同居の娘（有＝１とするダミー変数），子どもの人数を変数として使用した。近・同居の息子／娘とは30分以内の距離に居住もしくは同居する者とした。ケア規範は検証的因子分析の結果，扶養期待感，性別役割分業観，非伝統的分業下家庭内役割分担観の３つの下位因子を有する高次因子構造となることが明らかになっており（山口 2005；山口 2006），本分析ではこのケア規範の高次因子の因子得点を使用した（「同居介護規範」「嫁介護規範」「子ども介護役割規範」（４件法）など８観測変数を測定）。家族介護不安は「家族から介護を受けられない不安」（４件法）が「大いにある」もしくは「少しある」と回答した者を「１」とするダミー変数を用いた。その他の変数は，性別（男性＝１とするダミー変数），年齢，学歴（高卒以上＝１とするダミー変数）である。

３．分析方法

分析方法としては，子どものジェンダー構成との関連を把握するため，息子と娘の両方いる者（N＝370），息子のみいる者（N＝205），娘のみいる者（N＝170）に区分してIC担い手選好に関する記述統計分析を行なった。また，男女差をχ^2検定で分析した。さらに，娘と息子両方いる者の場合は，娘あるいは息子の妻の回答を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析，息子のみいる者の場合は，息子の回答を従属変数とするロジスティック回帰分析を行なった。結果はBとBのオッズ比（＝Exp（B））で示した。

III．結　果

１．息子・娘・息子の妻ケアによるケアに対する選好

IC担い手選好の結果の前に，FC／IC組み合わせ選好における「すべてFCで」の回答の動向を概観すると，有子者の「すべてFCで」の回答は，身体的ケア選好（20.3%），生活援助選好（17.1%），相談選好（15.5%），声かけ選好（10.9%）の順で多く，手段的なケア，とくに身体的ケアにおいてFCのみを選好する割合が高いことがわかる。 また，どのような子どものネットワークを有するかが回答パターンに関連し，どのケア内容についても，息子のみいる者が，娘のみいる者や娘と息子両方いる者よりも「すべてFCで」回答の比率が高かった。

IC担い手選好はこれらのFC／IC組み合わせ選好における「すべてFCで」の回答者を除いて把握した。表１の通り，４つのケア内容すべてにおいて娘の回答が最多であった。身体ケアの場合は約半数強（51.6%）が娘と回答し，息子という回答の倍以上であるが，声かけの場合は娘（45.6%）と息子（41.6%）で差がほとんどなかった。息子への選好は相談（41.6%）で最も高く，身体ケア（23.1%）が最も低い。息子の妻に対する選好は手段的な身体ケア（21.3%）や生活援助（20.7%）で高く，相談（9.6%）が最も低い。４つのケア内容において，息子，娘，息子の妻の合計で94%以上であった。

表１　IC担い手選好［有子者全員（N＝745）のうち組み合わせ選好にICを含めた者］　N（%）

	息子	娘	息子の妻	その他	合計
身体ケア選好	127（23.1）	284（51.6）	117（21.3）	22（4.0）	550（100.0）
生活援助選好	163（28.2）	270（46.6）	120（20.7）	26（4.5）	579（100.0）
相談選好	248（41.6）	272（45.6）	57（9.6）	19（3.2）	596（100.0）
声かけ選好	213（33.9）	291（46.3）	89（14.1）	36（5.7）	629（100.0）

子どものジェンダー構成を考慮するために，娘も息子も有する者（N＝370），娘のみ有している者（N＝170），息子のみ有している者（N＝205）に区別して分析した結果，娘も息子も有する者（N＝370）の場合（表２），回答パターンは有子者全体とほぼ同様であるが，娘の回答が若干高いことがわかる。娘の回答は身体ケアの場合（53.3%）が最も高い。性別（父親と母親）による違いをクロス集計で分析した結果，声かけ選好に有意差があり，その他の回答を除いた分析では相談も有意な差があり，同一の性を選好する傾向が認められた。

表２　IC担い手選好［娘と息子あり（N＝370）のうち組み合わせ選好にICを含めた者］　N（%）

	息子	娘	息子の妻	その他	合計	χ^2
身体ケア選好	59（21.4）	147（53.3）	59（21.4）	11（4.0）	276（100.0）	n.s.
男性	38（26.4）	73（50.7）	26（18.1）	7（4.9）	144（100.0）	
女性	21（15.9）	74（56.1）	33（25.0）	4（3.0）	132（100.0）	
生活援助選好	82（28.1）	139（47.6）	61（20.9）	10（3.4）	292（100.0）	n.s.
男性	47（31.5）	70（47.0）	27（18.1）	5（3.4）	149（100.0）	
女性	35（24.5）	69（48.3）	34（23.8）	5（3.5）	143（100.0）	
相談選好	126（42.3）	136（45.6）	28（9.4）	8（2.7）	298（100.0）	（注）
男性	81（53.6）	59（39.1）	7（4.6）	4（2.6）	151（100.0）	
女性	45（30.6）	77（52.4）	21（14.3）	4（2.7）	147（100.0）	
声かけ選好	101（32.0）	151（47.6）	48（15.2）	16（5.1）	316（100.0）	11.8**
男性	62（38.8）	72（45.0）	16（10.0）	10（6.3）	160（100.0）	
女性	39（25.0）	79（50.6）	32（20.5）	6（3.8）	156（100.0）	

（注）*** $p<.001$　** $p<.01$　* $p<.05$

相談選好は有意だが２セルが期待度数未満であったため，その他を除いて再検定した結果，
χ^2（df＝2）＝19.6*** となった.

娘のみ有している者（N＝170）の場合（表３）は，他のICの回答が少なく，娘回答が圧倒的であり，最も少ない声かけの場合でも94.6%が娘回答であった。

表３　IC担い手選好［娘のみ（N=170）のうち組み合わせにICを含めた者］　N（%）

	娘	息子の妻	その他	合計
身体ケア選好	137（97.2）	1（0.7）	3（2.1）	141（100.0）
生活援助選好	131（95.6）	1（0.7）	5（3.6）	137（100.0）
相談選好	136（96.5）	1（0.7）	4（2.8）	141（100.0）
声かけ選好	140（94.6）	1（0.7）	7（4.7）	148（100.0）

息子のみ有している者（N＝205）の場合（表４），全てのケア内容において，息子へのケア担い手選好が息子の妻への選好よりも高い結果を示した（身体援助：息子51.1%，息子の妻42.9%，生活援助:息子54.0%，息子の妻38.7%，相談：息子77.7%，息子の妻17.8%，声かけ：息子67.9%，息子の妻19.5%）。ケア内容により息子の比率が異なり，相談や声かけなど非手段的ケアの方が息子の比率が高い。また，男性が女性よりも息子の回答が多く，その他を除いた男女差検定では身体ケア（$p<.05$）と相談（$p<.001$）が有意であった。

表４　ケア内容別IC担い手選好［息子のみ（N＝205）のうち組み合わせ選好にICを含めた者］　N（%）

	息子	息子の妻	その他	合計	χ^2
身体ケア選好	68（51.1）	57（42.9）	8（6.0）	133（100.0）	（注）
男性	39（63.9）	21（34.4）	1（1.6）	61（100.0）	
女性	29（40.3）	36（50.0）	7（9.7）	72（100.0）	
生活援助選好	81（54.0）	58（38.7）	11（7.3）	150（100.0）	n.s.
男性	40（63.5）	21（33.3）	2（3.2）	63（100.0）	
女性	41（47.1）	37（42.5）	9（10.3）	87（100.0）	
相談選好	122（77.7）	28（17.8）	7（4.5）	157（100.0）	（注）
男性	64（90.1）	4（ 5.6）	3（4.2）	71（100.0）	
女性	58（67.4）	24（27.9）	4（4.7）	86（100.0）	n.s.
声かけ選好	112（67.9）	40（19.5）	13（7.9）	165（100.0）	
男性	55（75.3）	14（19.2）	4（5.5）	73（100.0）	
女性	57（62.0）	26（28.3）	9（9.8）	92（100.0）	

（注）*** $p<.001$　** $p<.01$　* $p<.05$

身体ケア，相談は有意だが，それぞれ2セル，１セルが期待度数未満であったため，その他を除いて再検定した結果，身体ケア（$\chi^2=5.2^*$），相談（$\chi^2=13.4^{***}$）となった.

２．娘・息子・息子の妻選好に対する多項ロジスティック回帰分析結果

息子と娘が両方いる者を対象とした，娘･息子･息子の妻選好に対する多項ロジスティック回帰分析の結果（表５），まず娘が従属変数の場合をみると，身体ケア選好は，近居の息子の有無と近居の娘の有無がともに$p<.001$水準で有意，性別は$p<.01$水準で有意であった。男性は，息子より娘を選択する確率が63%低まり，近居の息子がいる場合，娘を選択する確率が81%低まり，近居の娘がいる場合，娘を選択する確率が3.8倍となった。生活援助選好は，近居の息子の有無と近居の娘の有無がともに$p<.001$水準で有意，性別は$p<.05$水準で有意であった。男性は，息子より娘を選択する確率が54%低まり，近居の息子がいる場合，娘を選択する確率が91%低まり，近居の娘がいる場合，娘を選択する確率が5.4倍となる。相談選好は，性別，近居の息子の有無，近居の娘の有無がすべて$p<.001$水準で有意であった。男性は，息子より娘を選択する確率が73%低まり，近居の息子がいる場合，娘を選択する確率が77%低まり，近居の娘がいる場合，娘を選択する確率が5.0倍となる。声かけ選好は，性別，近居の息子の有無，近居の娘の有無がすべて$p<.001$水準で有意であった。男性は，息子より娘を選択する確率が58%低まり，近居の息子がいる場合，娘を選択する確率が69%低まり，近居の娘がいる場合，娘を選択する確率が4.5倍となった。

次に，息子の妻が従属変数の場合をみると，身体ケア選好は，性別が$p<.05$水準で有意，子どもの数は$p<.10$で有意に近かった。男性の場合，息子より息子の妻を選択する確率が57%低まり，子

どもの数が多いほど，息子の妻を選択する確率が1.9倍となる。生活援助選好は，有意な変数はなく，性別が有意に近かった（$p<.1$）。男性の場合，息子より息子の妻を選択する確率が47％低まる傾向にある。相談選好は，性別のみ有意であり（$p<.01$），男性の場合，息子より息子の妻を選択する確率が78％低まる。声かけ選好は，性別のみ有意で（$p<.01$），男性の場合，息子より息子の妻を選択する確率が 70％低まる。

表５　IC担い手選好に対する多項ロジスティック回帰分析［娘と息子両方いる者（N＝370）対象］

	身体ケア選好		生活援助選好		相談選好		声かけ選好	
	B	Exp（B）	B	Exp（B）	B	Exp（B）	B	Exp（B）
娘								
性別（男性＝１）	−.994**	.370	−.795*	.452	−1.327***	.265	−.875**	.417
年齢	−.019	.981	−.049	.952	−.058	.943	−.080	.923
学歴（高卒等以上＝１）	−.009	.991	.204	1.226	−.093	.911	.145	1.156
子ども数	.323	1.381	.062	1.064	−.064	.938	−.504	.604
近・同居の息子（有＝１）	−1.661***	.190	−2.444***	.087	−1.493***	.225	−1.164***	.312
近・同居の娘（有＝１）	1.343***	3.831	1.699**	5.466	1.608***	4.993	1.516***	4.553
ケア規範	−.275	.760	.639	1.895	−.791	.453	−.383	.682
家族介護不安（有＝１）	−.198	.821	.087	1.091	−.120	.887	.035	1.036
定数	2.561		4.646		4.898＋		7.249	
息子の妻								
性別（男性＝１）	−.860*	.423	−.636＋	.529	−1.515**	.220	1.230**	.299
年齢	.046	1.047	.009	1.009	.072	1.074	.796	1.018
学歴（高卒等以上＝１）	−.337	.714	.055	1.057	−.271	.911	3.464	1.045
子ども数	.676＋	1.966	−.073	.930	−.173	.938	.846	.704
近・同居の息子（有＝１）	.045	1.046	.055	1.057	17.731	−	.442	1.045
近・同居の娘（有＝１）	.416	1.516	.099	1.104	.238	.845	.238	1.443
ケア規範	.241	1.273	1.390	4.016	−.168	.806	.453	.679
家族介護不安（有＝１）	−.144	.866	−.015	.985	.331	.887	.453	.645
定数	4.165		−.082		−22.79**		−1.436	
−２対数尤度／χ^2	422.2	68.3***	452.5	98.4***	394.7	116.0***	474.1	91.7***
Nagelkerke擬似R^2	.279		.354		.408		.320	
分析N	249		266		275		283	

*** $p<.001$　** $p<.01$　* $p<.05$　＋$p<.10$

（注）相談の場合の近居の息子変数は誤差が０のためExp（B）は表記しない.

３．息子選好に対するロジスティック回帰分析結果

息子のみいる者のうち息子もしくは息子の妻と回答した者を対象とした，息子を担い手として選好する場合のロジスティック回帰分析の結果（表６），身体ケア選好は，性別と家族介護不安が$p<.05$水準で有意であった。男性の場合，息子の妻より息子を選択する確率が2.5倍となり，家族介護不安がある者はそうでない者より，息子を選択する確率が2.8倍となる。生活援助選好は，家族介護不安のみ有意であった（$p<.01$）。家族介護不安がある者はない者より，息子を選択する確率が3.4倍となる。相談選好は，性別のみ有意であった（$p<0.1$）。男性の場合，息子を選択する確率が5.4倍となる。声かけ選好は，近居の息子のみ有意（$p<.05$）

でケア規範と家族介護不安が有意に近かった（p＜.１）。近居の息子がいる場合，息子の妻より息子を選択する確率が91％低まり，ケア規範が強いほど息子を選択する確率が10.2倍となり，家族介護不安がある者はない者より，息子を選択する確率が2.1倍となった。

表６　息子選好に対するロジスティック回帰分析
［息子のみいる者（N＝205）のうち息子あるいは息子の妻を選択した者を対象］

	身体ケア選好		生活援助選好		相談選好		声かけ選好	
	B	Exp（B）	B	Exp（B）	B	Exp（B）	B	Exp（B）
性別（男性＝１）	.897*	2.452	.525	1.691	1.689**	5.412	.507	1.661
年齢	.043	1.044	－.044	.957	.066	1.068	－.024	.976
学歴（高卒以上＝１）	.443	1.557	.227	1.254	.626	1.870	.207	1.230
息子の数	－.359	.699	.294	1.342	.008	1.008	.140	1.150
近居の息子（有＝１）	－.011	.989	－.987	.373	－1.510	.221	－2.508 *	.081
ケア規範	1.213	3.346	.955	2.598	.367	1.443	2.323＋	10.211
家族介護不安（有＝１）	1.019*	2.771	1.215**	3.372	.246	1.278	.759＋	2.136
定数	－3.266*		2.611		－2.507＋		4.000	
－２対数尤度／χ^2	148.8	13.1＋	159.75	16.0*	111.6	17.4*	145.0	16.4*
Nagelkerke擬似R^2	.141		.156		.193		.160	
分析N	118		130		142		143	

*** p＜.001　** p＜.01　* p＜.05　＋p＜.10

Ⅳ．考　察

１．ジェンダー化されたライフコースの視点からみたケア・ミックス

本研究の目的は配偶者喪失期における高齢者自身の成人子によるケアに対する選好を子どものジェンダー構成の違いに焦点をあてて分析し，ケア・ミックスにおけるジェンダー関係を検討することであった。今回のIC担い手選好の分析を高齢者一人のケア・ミックスへの選好の中で位置づけるには，FC／IC組み合わせ選好で「すべてFCで」と回答し本分析の対象外となった人と関連づけて議論する必要がある。「すべてFCで」と回答し本分析の対象外となった人数は，身体ケア選好が最も多く，声かけ選好が最も少ない。身体ケアの場合，息子のみいる者は娘のみいる者や息子と娘がいる者よりも「すべてFC」の割合が高かった。これは，息子を選好しない中で介護保険を中心としたフォーマルなケアの活用により，息子の妻にケア役割を強制しないでケア・ミックスを構築しようとする，高齢者自身の適応的な戦略ともとることができる。大久保（2004）は，女性の介護経験の「双系化」（双方の親を介護）が1930年代前半コーホートから始まっていることをNFRJ98データから実証しているが，フォーマルなケアの活用により介護経験の双系化の傾向が変わる可能性もある。

分析の結果，有子者のIC担い手選好は４つのケア内容（身体的ケア，生活援助，相談，声かけ）全てにおいて，娘，息子，息子の配偶者の合計で９割超であり，子世代への選好が根強いこと，特に身体ケアの場合，娘の割合が多いが息子の妻よりも息子の回答割合が多い点などから，選好レベルにおいてケアのジェンダー役割意識が揺らぎつつある可能性があること，特に非手段的ケアにおいては男性による息子への強いケア選好が示され，担い手としての子の性別だけでなく，高齢者自身の性別とも関連し，多様なIC担い手選好であることがわかった。女性の場合の方が，男性より息子を選択する割合が低いのは，性別の違いに伴うタブー（Campbell and Martin-Marthews 2003）の影響ともとることができる。

さらに，息子のみいる者，息子と娘の両方のいる者，娘のみいる者に区分して分析した結果，子どものジェンダー構成の違いによるIC担い手選好の多様性を確認することができた。息子と娘の両方いる者の約半数が４つのケア内容について娘を選好し，特に，身体ケアの場合は，娘選好が53.3%と他のケアの比率より高く，手段的なケアほど，娘を選好する傾向がうかがえた。ただし，ケア内容別に「息子」回答が減少すると「息子の妻」回答が増加し，「娘」回答には影響していなかった。このような息子の妻への回答があるため，息子と娘のジェンダー役割の違いが読み取りにくい点には留意を要する。

息子のみいる場合をみると，身体ケアにおいても，「息子」回答の方が「息子の妻」回答より多い点が注目される。これはいわゆる「嫁」としての息子の妻の介護者役割のゆらぎともよみとれる。息子のみいる者においては，息子の妻のケア役割解放と，ケアのもつ身体性（山田 1999）の影響が交錯する中で，複雑な結果を示していると解釈できる。今回のデータは横断データであり，時系列な傾向はわからないものの，国際比較意識調査のデータを用いて1980年と比し，フォーマルなケアへの選好の増加や，嫁介護者が減少し，夫・息子介護者が増加している点を指摘している研究（Kono 2000）と同様な傾向が一地方都市においても示されている可能性がある。また，世話を受ける側の女系フロー（白波瀬 2000）の議論とも関連するが，今回の結果は高齢者自身の選好レベルにおいて，娘によるケアの選好とそれが困難な場合は息子へのケア選好という実子によるケアの選好が明確になった。

すでにフォーマルなケア選好やFC／IC組み合わせ選好とその関連要因の分析をしたが（山口 2005；山口・冷水・石川 2007 & 2008），本分析では親子間や子ども同士のジェンダー構成に焦点をあて担い手に対する選好を把握した結果，これまでの分析では見えにくかったケア・ミックスにおける担い手への選好の多様性を明確化できた。個々人のジェンダー化されたライフコースにおけるダイアドな関係に着目して，家族を中心としたIC担い手に対する高齢者自身の選好を分析し，ケア・ミックスの中で位置づけた意義はある。

２．息子・娘・息子の妻へのケア担い手選好とその関連要因

息子・娘・息子の妻へのケア担い手選好とその関連要因についてみると，息子と娘の両方がいる者を対象とした多項ロジスティック回帰分析の結果，生活援助選好を除く３つの選好で性別が有意な変数であり，女性の方が男性よりも娘を選好する結果となった。近･同居子の有無は影響するが，ケア規範，家族介護不安，学歴はどの内容にも有意ではないことがわかった。身近な娘の存在はとくに母親の選好を高める結果となっており，これまでの親子関係の延長上に高齢期のケアリング関係があることが確認できる。

息子のみいる者を対象としたロジスティック回帰分析の結果，身体ケア選好と相談選好に対して性別が有意であり，男性の方が女性よりも息子を選好する結果となった。声かけ選好は近・同居の息子がいると，息子よりも息子の妻を選好する割合が高まった。ケア規範は声かけ選好において，ケア規範が強いほど息子を選択する確率が高まる傾向（$p<.1$）が示されたものの学歴と同様に有意ではなかった。家族介護不安は身体ケア選好と生活援助選好に有意で，家族介護不安が強いほど，息子の妻よりも息子を選好する結果となった。

ケア規範との関連は示されなかったが，ケア規範の下位概念である扶養義務感と性別役割分業観において，扶養義務感は子ども両方に関連し，性別役割分業観は息子，娘，息子の妻という実子関係とジェンダー関係の要素が入ることで，影響が不明瞭になっているととらえることができる。また，ケア規範と家族介護不安の関連の強さも影響している可能性がある。娘と息子がいる場合，家族介護不安は有意な変数ではなかったが，息子のみいる場合，身体ケア，生活援助，声かけ選好において家族介護不安がある者はない者より息子を選択する確率が高まる結果となった。息子のみい

る者の場合にのみ，この変数が有意に関連する変数となったことは，興味深い結果だが，因果の方向性は不明瞭な点に留意を要する。「嫁介護規範」に肯定的な回答（有子者）は36.2%と「子ども介護役割規範」の68%と比較して低い。娘がいない者はこのような「嫁」への期待が減少する中，不安を伴いながらも息子を選択しているのかもしれない。「高齢者の健康に関する意識調査」（内閣府2003a）の1997年と2002年の比較では，息子の妻へのケア担い手選好の低下傾向が示されていたが，本結果も同様な傾向を反映している可能性がある。春日（2001）は，介護責任が曖昧化し，家族観の葛藤を生んでいる点や，男性は老妻への介護依存が強まり，子世代への期待は嫁から娘へ移行している点を指摘したが，とくに娘というオプションがないあるいは活用が困難な場合には息子への選好として息子への介護依存が強まるかもしれない。息子による親の虐待を防止するためにも，ケア役割を予期していない息子のケアを支える仕組みも検討する必要があるだろう。高齢者のケア・ミックスはマクロな議論もあるが（河野 2004），今回のような実証研究結果を踏まえたミクロな議論も深めることが求められる。

Ⅴ．まとめと今後の課題

本分析では有子者のIC担い手選好について分析し，娘のみいる者，息子のみいる者，息子と娘の両方いる者に区別してケアの担い手選好を分析したことにより，高齢者の持つ子ども資源の特性やジェンダー構成により，IC担い手選好パターンが異なる点やIC担い手選好の多様性を明確にできた。親のジェンダーとケアの資源としての子どものジェンダー構成が相互にIC担い手選好に関連していることがうかがえた。ジェンダー構成については，娘と息子だけでなく，息子の妻も担い手として選好される点，すべての人が娘と息子を有しているわけではない点が分析を複雑にしているが，ケアの担い手に関する議論に，今回のようなジェンダーの視点からの分析は重要であろう。

配偶者喪失期においては，FCとICの組み合わせを選好する者の多くが，家族，主に次世代の息子・娘・息子の妻をケアの担い手として選好している。老親扶養という子どもの役割が伝統的であることを考慮すれば，当然ともいえる結果である。ただし，ライフコースの中で，配偶者がケアの担い手として期待できないタイミングにおいては，成人子との関係が高齢者個々人のケア・ミックスの中で重要な要素であることを確認することは，高齢者ケアに関するよりマクロなFCとICの関連を理解するする上でも重要な意味をもつだろう。一地方都市での調査結果であり一般化はできないが，ケア・ミックスにおけるジェンダー関係の違いによるIC担い手選好の多様性を確認できたといえる。ジェンダー化されたライフコースの視点から，高齢者自身の選好を可能な限り考慮したケア・ミックスの在り方について研究をすることが今後の課題である。

謝辞　本稿は博士学位論文（山口2005）における分析の一部を加筆・修正の上まとめた。ご指導いただいた冷水豊先生に深く感謝の意を表したい。

注

（1）本稿のデータは高齢者の地域ケアに関する共同研究（代表：上智大学冷水豊教授）のデータの一部である．調査時点のA県B市の人口は約5.6万人，高齢化率は19.5%であった．調査にあったては事前に趣旨を説明し，倫理的配慮をした．本人回答が困難と考えられた「要介護1」より重い要介護の者（12名）は調査対象から除いた．

引用文献

Akiyama, H., Antonucci, T.C., and Campbell, R. (1997) Exchange and Reciprocity Among Two Generations of Japanese and American Women. J. Sokolovsky ed., *The Cultural Context of Aging: Worldwide Perspectives* (2nd ed.). Bergin & Garvey, 163－178.

安藤由美（2004）「老親介護の構造 ― 介護者としての子の視点から ―」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著『現代家族の構造と変容：全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会，149－158.

Antonucci, T.C., and Akiyama, H. (1996) Convoys of So-

cial Relations: Family and Friendships with a Life Span Context. Blieszner, R. and Bedford, V. H eds., *Aging and the Family: Theory and Research,* Preager Publisher. 355-371.

Blieszner, R. and Hanmon, R.R. (1992) Filial Responsibility: Attitudes, Motivations, and Behaviors, W. Dwyer Jeffrey and R. T. Coward eds., *Gender, Families, and Elder Care*, SAGE Publications, Inc. 105-119.

Campbell, L.D. and Martin-Marthews, A. (2003) The Gendered Nature of Men's Filial Care. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 58B (6), S350-S358.

Denton, M.(1997) The Linkages between Informal and Formal Care of the Elderly. *Canadian Journal on Aging* 16 (1) :30-50.

Doty, P., Jackson, M.E., and Crown, W.(1998) The Imapct of Female Caregivers' Employment Status on Patterns of Formal and Informal Eldercare. *The Gerontologist*, 38 (3), 331-341.

Finley, N. J. (1989) Theories of Family Labor as Applied to Gender Differences in Caregiving for Elderly Parents. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 79-86.

藤崎宏子（2000）「親と子 ― 交錯するライフコース」藤崎宏子編『親と子 ― 交錯するライフコース』ミネルヴァ書房　1－5.

藤崎宏子（2002）「介護保険制度の導入と家族介護」金子勇編『高齢化と少子社会』ミネルヴァ出版，191−222.

藤崎宏子（2004）「福祉改革と家族変動－２つの制度領域間のインターフェイス」『福祉社会学研究』1，113−125.

春日キスヨ（2001）『介護問題の社会学』岩波書店.

小林江里香（2004）「子どもの特性および子どもへの資産提供が老親介護にもたらす効果」東京都老人総合研究所社会参加・介護基盤研究グループ編『後期高齢期における健康・家族・経済のダイナミクスⅡ』東京都老人総合研究所，39－54.

Kono, M. (2000) The Impact of Modernization and Social Policy on Family Care for Older People in Japan. *Journal of Social Policy, 29* (2), 181-203.

河野真（2004）「高齢者ケアのウエルフェアミックス」社会政策学会編『新しい社会政策の構想：20世紀的前提を問う（社会政策学会誌第11号）』116）133.

Koyano, W.(1996) Filial Piety and Intergenerational Solidarity in Japan. *Hong Kong Journal of Gerontology*, 10 (1), 3-10.

Koyano, W., Hashimoto, M., Fukawa, T. et. al. (1994) The Social Support System of the Japanese Elderly. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 9, 323-333.

Matthews, S. H. (1995) Gender and the Division of Filial Responsibility between Lone Sisters and Their Brothers. *Journal of Gerontology: Social Sciences,* 50B (5), S312-320.

Moen,P. (2001) The Gendered Life Course, R. H. Binstock and L. K. George eds., *Handbook of Aging and the Social Science*, Academic Press 179-196.

Montgomery, R.J. V. (1992) Gender Differences in Paterns of Child-parent Caregiving Relationships, W. Dwyer Jeffrey and R. T. Coward eds., *Gender, Families, and Elder Care*, SAGE Publications, Inc. 65-83.

内閣府（2001）『高齢者の生活と意識：第5回国際比較調査報告書』ぎょうせい.

内閣府（2003a）『高齢者の健康に関する意識調査』

内閣府（2003b）『高齢者介護に関する世論調査』

大久保孝治（2004）「介護経験の「双系化」― 彼女たちは何人の，そしてどの親を介護したか」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著『現代家族の構造と変容：全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会，159－172.

Pinquart, M. and Sorensen, S. (2002) Older Adults' Preferences for Informal, Formal, and Mixed Support for Future Care Needs: A Comparison of Germany and the United States. *International Journal of Aging and Human Development*, 54(4), 291-314.

Rossi, A.S. (1993) Intergenerational Relations: Gender, Norms, and Behavior, V. L. Bengtson and W. A. Achenbaum eds., *The Changing Contract Across Generations*, Aldine De Gruyter, 191-211.

笹谷春美（1999）「家族ケアリングをめぐるジェンダー関係 ― 夫婦間ケアリングを中心として ―」鎌田とし子・矢澤澄子・木本喜美子編『講座社会学14ジェンダー』，東京大学出版会，213－248.

白波瀬佐和子（2000）「家族内支援と社会保障 ― 世代間関係とジェンダーの視点から ―」『季刊・社会保障研究』，36－1, 122－133.

袖井孝子（1993）「主婦の家庭外就業とケア機能の外部化」森岡清美監修『家族社会学の展開』培風館，222－240.

Ungerson, C. (1987) Policy is Personal: Sex Gender and Informal Care （＝1999 平岡公一・平岡佐智子訳『ジェンダーと家族介護 ― 政府の政策と個人の生活』，光生館）.

山田昌弘（1999）「ケアとジェンダー」江原由美子・山田昌弘著『ジェンダーの社会学』，放送大学教育振興会，152－162.

山口麻衣（2005）「高齢期のケア選好とケア資源：ジェンダーとライフコースの視点からみたフォーマル・ケアとインフォーマル・ケア関連の分析」，上智大学大学院文学研究科 2004 年度博士学位論文（社会福祉学）.

山口麻衣（2006）「高齢者のケア規範 ― 扶養期待感とジェンダー規範の関連を中心に ―」『老年社会科学』

27，407－415.
山口麻衣・冷水豊・石川久展（2007）「フォーマル・ケアとインフォーマル・ケアの組み合わせ選好と地域特性との関連 ― 高年住民のケア選好に着目して ―」『日本の地域福祉』20，87－99.
山口麻衣・冷水豊・石川久展（2008）「フォーマルケアとインフォーマルケア組み合わせに対する地域高齢住民の選好の関連要因」『社会福祉学』49，123－134.
大和礼子（2004）「介護ネットワーク・ジェンダー・社会階層」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編著『現代家族の構造と変容：全国家族調査［NFRJ98］による計量分析』東京大学出版会，367－385.
Wielink, G., Huijsman, R., and McDonnell, J. (1997) Preferences for Care: A Study of the Elders Living Independently in the Netherlands. *Research on Aging*, 19 (2), 174-198.

Gender Relation in Care Mix

― Analysis of Older Persons' Preferences for Care Provided by Adult Children ―

Yamaguchi, Mai

The purpose of this study is to analyze older persons' preferences for care provided by his or her adult children in order to understand gender relation in care mix. The sample examined was among the elderly who have a child in city B within prefecture A (n=745, age ranging from 60 to 74). The main findings are the following: a) Gender role norm would be weakened in that the response-portion of the preferences toward son(s) is larger than that of daughter-in-law(s) in ADL care, although that of daughter(s) is largest; b) Since the male response-portion of preferences toward son(s) is large in non-instrumental care, it would be important to consider parent-child's gender composition; c) Results of multinominal logistic regression for those who have both son(s) and daughter(s) revealed that females are more likely than male to choose the daughter in ADL care, counseling, and verbal interaction; and d) Results of logistic regression for those who have only son(s) reveal that males are more likely than females to choose a son in ADL care and counseling. Although there are limitations in generalizations about these findings, the result of the data analyses for those who have only daughter(s), only son(s), both daughter(s) and son(s), separately confirmed a diversity in care mix according to the differences of gender relations within a family context.

Key Words : Care mix, Care preference, Informal care, Family care, Gender